平塚の
石仏めぐり
14. 上吉沢（上吉沢）編

山ノ神青年会館脇 地蔵

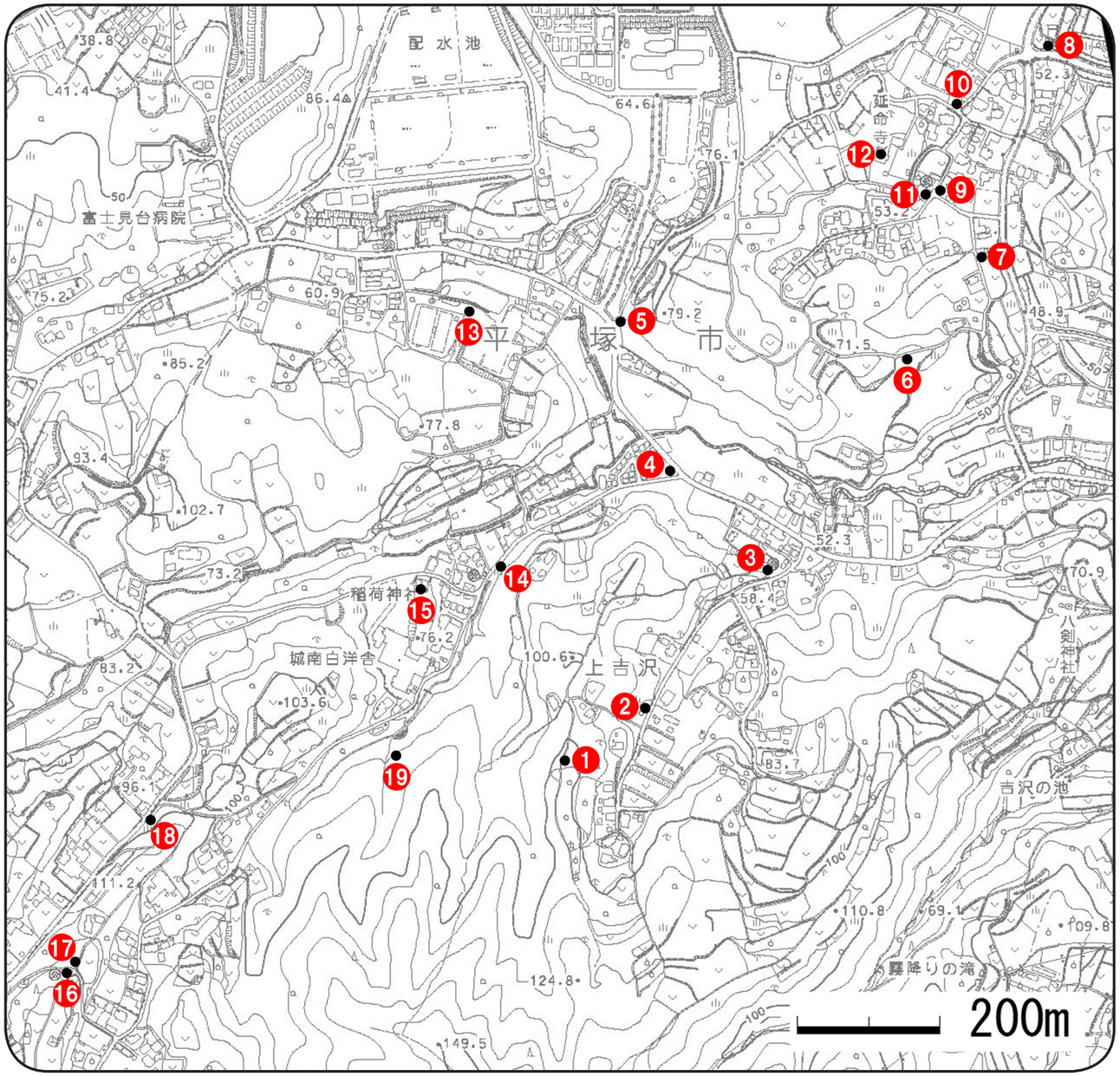
上吉沢（上吉沢）の石仏

上吉沢は、平塚市西部の大磯丘陵に立地し、南部は大磯町と接しています。高度経済成長期までは純然とした農業地域で、丘陵に立地することから煙草栽培などの畑作が中心となっており、『新編相模國風土記稿』による天保年間における上吉沢村の戸数は 102 戸でした。昭和 60 年代以降、丘陵地の東部には日向岡、北部にはめぐみが丘が宅地造成されました。

旧上吉沢村の各集落は丘陵の谷である谷戸ごとに分散しており、行政区分ではありませんが台、山ノ神、山田屋敷、飛谷津（とびやつ）、山入（しじゅうはた）、四十畑の六集落を上吉沢、寺前、宮下、新宿（しんじゅく）、神戸（ごうど）の四集落を中吉沢と称していました。

このマップでは主に上吉沢に点在する石造物を紹介します。この地で確認されている信仰に起因する石造物は 72 基あまりで、そのうち 36%の 26 基が台にある延命寺、そしてかつて隠居されたお坊さんが住まわれていたお堂のあった山ノ神青年会館脇にあります。

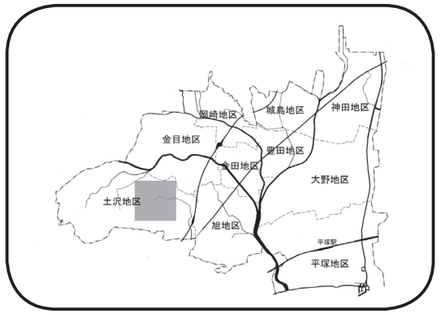
種別で見ますと、道祖神が最も多く各谷戸に 10 基造立されています。次いで数が多いのは地蔵で 7 基、庚申塔 5 基の順となっています。見どころとしては山ノ神自治会館脇の大変古い地蔵や阿弥陀如来、山入四十畑自治会館脇の寒念仏百番観音供養塔、延命寺の珍しい閻魔や十王の一部など沢山の石仏に出会えます。



上吉沢の石仏所在地と主な石仏

番号	名　称	住　所	主　な　石　仏
1	上吉沢山ノ神畑中	上吉沢 1159	浅間大神
2	上吉沢山ノ神路傍	上吉沢 1177	道祖神
3	山ノ神青年会館脇	上吉沢 1190	地蔵、阿弥陀、観音、地神塔、庚申塔、道祖神他
4	上吉沢笠神路傍	上吉沢 1216	地蔵
5	上吉沢飛谷津路傍	上吉沢 1290	聖観音
6	上吉沢神戸路傍	上吉沢 626	馬頭観音多数
7	上吉沢台路傍	上吉沢 1378	道祖神
8	三狐神社	上吉沢 1452	道祖神、地神塔
9	上吉沢台路傍	上吉沢 1391	馬頭観音
10	上吉沢台路傍	上吉沢 1506	道祖神
11	上吉沢台路傍	上吉沢 1508	馬頭観音
12	延命寺	上吉沢 1514	六地蔵庚申塔、釈迦、閻魔天、十王他多数
13	上吉沢飛谷津山裾	上吉沢 1813	道祖神、庚申塔他
14	上吉沢山田屋敷路傍	上吉沢 1873	地蔵・庚申塔他
15	復興稲荷	上吉沢 1954	奉納塔他
16	山入四十畑自治会館脇	上吉沢 2208	二十三夜塔、徳本名号塔寒念仏百番観音供養塔他
17	同自治会館前	上吉沢 2217	牛頭天王
18	上吉沢四十畑路傍	上吉沢 2263	道祖神
19	宗海寺跡	上吉沢 2482	地蔵、大日如来他

※ 当ガイドマップに記載されている石仏の基数は令和 3 年集計時点のものです。



石仏豆知識 10. 地蔵菩薩

地蔵菩薩は親しみを込めて「お地蔵さん」と呼ばれ、私たちが最も身近に感じることができる仏様です。市内でも信仰に起因する石造物の中で最も数多く造立され、現在 306 基が確認されており、その内紀年銘が彫られているかもしくは明らかなものは 148 基です。

地蔵はお釈迦様が亡くなられてから弥勒（みろく）菩薩が現れるまでの無仏の間、この世に現れて私たちを救済してくれる仏さまと言われています。

地蔵の起源は古代インドに始まり、古代中国を経て我が国に伝来、平安時代中後期から始まった末法思想の弥陀信仰、浄土信仰とも結びつき、次第に庶民の間に浸透し、地獄における救済の仏として信仰されました。賽の河原で地蔵が子供を庇護する姿は、しばしば絵図や和讃などを介して知られ、幼児の延命利生（えんめいりしょう）を祈願する子安地蔵と延命地蔵の信仰を広めました。

地蔵の石像は、柔和なお顔で法衣（ほうえ）を纏（まと）った僧の形であらわされます。多くは立像と坐像で、半跏像（はんかぞう）は僅（わず）かです。持ち物は、右手に錫杖（しゃくじょう）、左手に宝珠を持つ姿であらわされるのが一般的で、次いで合掌像が多く見られます。

銘文からたどれる市内で最も古い地蔵は、根坂間宝珠院の万霊塔内に寛永 6 年 (1629) の造立と推定される立像があります。次いで、土屋惣領分路傍にある承応 2 年 (1653) 銘の立像、豊田平等寺境内にある承応 3 年 (1654) 銘の立像、広川の善福寺と上吉沢の山ノ神青年会館脇にある万治 3 年 (1660) の立像などがあり、それぞれ見ごたえのある像容です。なお、上吉沢の妙覚寺には「頬焼け地蔵」と呼ばれる坐像があり、紀年銘はありませんが寺伝では中世室町時代の作とされています。

石仏めぐりを行う場合の心掛け

石仏は、古来より多くの人々がさまざまな願いをこめて手を合わせ祈ってきたものです。今でも信仰の対象とされているものも数多くありますので、見学に当たっては、敬いの心を持って接しましょう。

また、お寺や神社など石仏の管理者がいらっしゃる場合は、石仏を見学する旨一声かけてから見学しましょう。

平塚の石仏めぐり（14. 上吉沢 (上吉沢) 編)
発行日：令和 4 年 11 月
編　集：石仏を調べる会
発　行：平塚市博物館
住　所：神奈川県平塚市浅間町 12-41
電　話：0463-33-5111

山ノ神青年会館脇の石仏　（地図番号③）

山の神バス停のすぐ近くに青年会館があります。この場所は以前お堂があり、明治初期までは隠居したお坊さんが住まわれていたといわれています。

その脇の高台に石仏群があり、向かって左から「地神塔」、「庚申塔」、「徳本名号塔」、「阿弥陀如来立像」、「地蔵菩薩立像」等々が並んでいます。どれも、1600 年代中頃（万治年間）から 1800 年代中頃（元治年間）までの江戸時代のものです。

地神塔　石仏群の一番左側にひときわ目立つ「地神社」と彫られた、安政 4 年 (1857) 造立の大きな地神塔があります。

地神は大地を司る神（農業の守護神）であり、神の依代（よりしろ）として大きな自然石を祀ったのであろうと思われます。

地神塔は市西部、北部の丘陵地に多くみられ、17 基確認されていますが、すべてが文字塔で、像容を刻む塔はありません。

阿弥陀如来　延宝 2 年 (1674) に建てられたもので、阿弥陀如来としては平塚市内で二番目に古いものです。

像高 86cmの小振りな立像ですが彫刻は細かくしっかりしており、塔頂部に阿弥陀如来の種子である「キリーク」が陰刻されています。右手を上に左手を下にして二つの輪を作る来迎印（らいごういん）を結び、念仏供養として建立したとの銘文があります。

地蔵菩薩　慈悲あふれる丸いお顔、長い錫杖（しゃくじょう）と宝珠を持つお姿は印象深く、素晴らしいお地蔵さんです。伏し目がちな顔や造形が、広川にある善福寺境内の地蔵と酷似し、同じ万治 3 年 (1660) に建てられていることから同一の石工によるものと思われます。それぞれ見ごたえのある像容です。

地蔵菩薩は、市内では 306 基を確認しており最も親しまれ数多く見かける石仏です。

山ノ神青年会館脇の石仏群

地神塔（安政 4 年）

阿弥陀如来（延宝 2 年）

地蔵菩薩（万治 3 年）

三狐神社の地神塔　（地図番号⑧）

三狐（さんこ）神社は台の鬼門に位置する守り神で、小高い社殿前に 2 基の地神塔、その下の道路脇に道祖神があります。

ともに正面は「地神塔」の銘が、角柱左面には「上吉澤村講中　天保五甲午龍集二月」（1834）、卵型の自然石左面には「久保中安全　明治五申八月吉日」（1872）とあります。

この台地区では近所の農家十数軒が自治会館に集まり、年に 1 回、春の彼岸の社日に近い日に地神講を行っているそうです。

地神塔（左 天保 5 年、右 明治 5 年）

上吉沢台路傍の単体道祖神　（地図番号⑩）

台では 3 ヶ所で道祖神を祀っていますがその一つ、五輪塔や宝篋印塔の残欠に囲まれて高さ 50cm ほどの小さな道祖神が祀られています。

舟型の頭頂部が少し欠けていて残念ですが両手を袖の中で合掌する単体像です。像の左右に「享保五庚子天　九月十三日　當村布施」（1720）と彫られています。

小正月には竹や杉で覆いを掛け、裏の畑でどんど焼きを行っています。

単体道祖神（享保 5 年）

延命寺の石仏（１）　（地図番号⑫）

延命寺は台の小高い地にあり、吉澤山地蔵院と号す天台宗の寺院です。江戸後期の火災で記録が焼失し、創建年代は不明ですが小田原北条氏から寺田を付されていたことから、かなり古い歴史を持つ寺と考えられています。本尊は半跏（はんか）の延命地蔵菩薩で、南北朝の文和 2 年 (1353) 造立で、市の指定文化財です。また相模新西国 25 番霊場の千手観音（旧千手院本尊）も安置されています。

六地蔵庚申塔　参道途中の右側に、総高２ｍほどの安定感のある重制六地蔵石幢（せきどう）があります。

六角の龕部（がんぶ）に六地蔵が浮彫され、円柱の幢身（どうしん）正面に「ｷｰ（バン）奉庚申供養」とあり、下部に三猿が浮彫されています。六地蔵信仰と庚申信仰の習合したもので、市内では北金目の不動院にもあります。江戸前期の貞享 4 年（1687）の造立で、市内の六地蔵の初出です。

六地蔵庚申塔（貞享 4 年）

延命寺の石仏群　本堂に向かって左の墓地へ続く道の一角に石仏が並んでいます。主なものとして左から庚申塔・釈迦如来・十王・閻魔（えんま）・十王です。

釈迦如来　笠付角柱の正面を舟型に彫り窪め、茎のある蓮に釈迦如来立像が浮彫されています。塔正面にある釈迦の種子「ｷｰ（バク）」と相輪四面に彫られた種子で五仏が表現されています。

延命寺の石仏（２）　（地図番号⑫）

塔の左面に「為慶運大徳逆修敬白」とあり、十王にも「上吉澤村　施主慶運大徳」とあることから、延命寺にゆかりのある高徳の僧が、生前に自分の死後の冥福のため造立したものと考えられます。市内に釈迦如来は 5 基ありますが、この寛文 10 年 (1670) が最古です。

閻魔・十王　総高 140cmの丸彫の閻魔と、その両脇に 2 基の十王があります。閻魔の本地（ほんじ）は地蔵菩薩で、地獄で人間の生前における善悪を審判する大王とされ十王の中心的な役割を果たしています。この閻魔は宝冠をかぶり道服を着けた忿怒相（ふんぬそう）です。かつては裏の墓地入口にあったそうで、両脇の十王は本来 10 基ですが、現在は摩耗の進んだ二王しか残っていません。しかし、左脇の十王の碑面に「寛文十三癸丑天□月日」（1673）の紀年銘があり、これらの閻魔と十王の石質が同じことから同時期の造立と考えられます。

左より 庚申塔（享保元年）、釈迦如来（（寛文 10 年）、十王（寛文 13 年）、閻魔（年代不詳）、十王（年代不詳）

上吉沢山田屋敷路傍の石仏　（地図番号⑭）

山入口停留所で三叉路をバス道から外れ西に数分ほど歩くと、ガードレールの内側路傍に小堂があります。その中に地蔵庚申塔、その脇に双体道祖神が祀られています。

地蔵庚申塔　享保 2 年 (1717) の造立です。角柱塔身正面には「奉造立庚申供養」、側面には「山田屋敷講中」と刻まれています。

ここには庚申塔によく見られる青面金剛も三猿もなく地蔵様が座しています。この地、山田屋敷に暮らした人々が庚申信仰と地蔵信仰を合わせてこの塔を祀り、生活の安寧、集落の安泰を祈り、大切にしてきたものと思われます。

地蔵庚申塔（享保 2 年）

道祖神　全高 50cm ほどの舟型像で、紀年銘の一部が欠落して、「□政六　未八月吉日」となっており、文政六年癸未 (1823) か安政六年己未 (1859) の可能性があります。

ともに冠をかぶり袖の中で合掌しています。風化のため表情はうかがい知れませんが、寄り添いほのぼのとした温かみを感じられる道祖神です。

双体道祖神（年代不詳）

上吉沢飛谷津山裾の庚申塔　（地図番号⑬）

飛谷津の南側山裾に宝篋印塔の残欠や双体道祖神（文化 9 年・1812）などとともに庚申塔があります。

残念なことに現在は折れて上半分は裏側に置かれています。残っている下半部は苔むし判別しにくいですが、三猿とわかる浮刻がまだ残っており、左から不聞猿、不言猿、不見猿と並んでいます。市内の庚申塔のなかでは寛文年間（1661 ～ 1672）と初期のころの古いものであります。

庚申塔（寛文年間）

山入四十畑（やまいりししじゅうはた）自治会館脇の石仏　（地図番号⑯）

山入バス停から吉沢中継所へ行く途中の小道を右に入ると山入四十畑自治会館があり、遠くに街を見下ろす里山風景を背に石仏群が並んでいます。

地蔵・念仏供養塔　享保 5 年 (1720)、「念仏講供養 上吉沢村山入中」と銘があり、長いあいだ人びとの信仰の拠り所となって祀られてきたのだと察せられます。全高 135cm の立派な地蔵で彫りもしっかり残り、その表情は何かひょうひょうとしています。地蔵の頭を撫で、その手で自分の身体の悪い所に触れると効くとされていました。

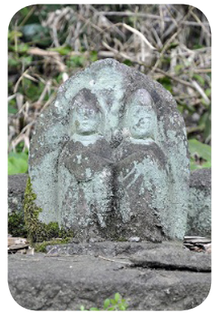
地蔵念仏供養塔（享保 2 年）

寒念仏百番観音供養塔　延享元年 (1744) に造立された高さ 74cm の塔で、塔正面中央には観音を表す梵字（ぼん）【ｷｰ】と「供養塔」、右に「夜行寒念佛」、左に「秩父坂東西国」とあり、野川氏他 2 名の方が、寒夜に念仏を唱える寒念仏行を行ったことと、百番観音を巡礼した記念の供養塔と思われます。珍しい夜行寒念仏の実施および市内での百番観音巡礼の初出を記録する塔として大変貴重ですが、現在はあおむけに倒れており残念です。

巡拝塔 念仏供養塔（延享元年）

上吉沢四十畑路傍の双体道祖神　（地図番号⑱）

山田屋敷から四十畑に向かう途中の路傍に、山入と四十畑で祀る高さ 32cm の小さな双体道祖神が斜面を背にぽつりと佇んでいます。元文 5 年 (1740) 造立で、左右とも烏帽子をかぶり、向かって右の神は袖の中で合掌し、左の神は袱紗（ふくさ）の上に宝珠を捧げ持っています。ここには明和 6 年 (1769) 造立の双体道祖神が並んで建っていましたが、台風により流され消失してしまいました。



双体道祖神（元文 5 年）